

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	雑賀 葉子 ジェンダー学際研究専攻 2011年度生		論文題目	紛争後復興期のジェンダー・クオータ —東ティモール女性のネットワーク化—
審査委員	主 査:	小林 誠 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	荒木美奈子 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	申 琪榮 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	倉光ミナ子 助教		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	古沢希代子 教授 (東京女子大学)		<input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (社会科学)	(Ph. D. in Political Science)		<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
				<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

この論文は、紛争終結後の選挙制度に導入されたジェンダー・クオータの実相を明らかにすることを目的としている。ジェンダー・クオータは今日数多くの諸国で採用されていることもあって、すでに多くの先行研究があるが、紛争終結後という文脈に注目した研究は十分ではない。この論文は、熾烈な闘争を経て独立を実現した東ティモールを取り上げ、多くの女性たちが赤裸々な性暴力を経験し、その体験を共有したことが、ジェンダー・クオータの導入と運営に大きな影響を与えたことを指摘している。また、女性政治家たちを支える広範で多様な人的ネットワークが、公式・非公式に形成され提携していたことで、ジェンダー・クオータの実現と運用が進められたことが明らかにされた。論文の前半は、理論的な問題設定と、独立に至るまでの東ティモールの前史的概括が行われる。後半が東ティモールでの現地調査を踏まえたジェンダー・クオータについての実証研究である。具体的には、2001年の制憲議会選挙、制憲議会から移行した国民議会の政治過程、および2007年国民議会選挙について、「記述的代表性」と「実質的代表性」の観点から女性の表出が進んだことを詳細に示した。これにより、選挙制度における法的ジェンダー・クオータには即効性があることが改めて示された一方で、女性が議会に参加することが可能になったとしても、女性たちが議会で積極的・自発的に意見を表明したり、ジェンダー平等を推進する法案の審議を主導できる立場になったのではないことも明らかにされた。当時の東ティモールの女性たちは、教育の面でも職業的な面でも進出に遅れ、文化的な遺制もあって、多様な障壁があったからである。しかしまた、そうした女性議員の進出を支えたのが、広範な人的ネットワークである。女性議員による超党派の女性議員ネットワークである GMPTL を通じて海外の女性議員と連携し、国内においてはナショナル・マシナリーや女性 NGO とのネットワーク Rede Feto との連携によって、議員としての能力を高める機会を作り、法案を通過させる戦略を立てることが可能となった。

審査委員会は2019年12月13日と2020年2月10日に行われ、公開発表会が3月2日に開催され、同日に最終審査会を開催した。審査過程では、問題設定と結論的考察の整合性、代表性の意味、政治過程の正確な記述、国際支援の限界などについての指摘があり、これらに的確な修正が行われ、公開のプレゼンテーションと質疑応答も適正に行われた。審査委員会は、博士(社会科学)にふさわしい水準であると判断した。